

ちんすこうりな「女の子のためのセックス」 宮益方面は知らない——に寄せて

ねまる

ちんすこうりな「女の子のためのセックス」を読んだ。「宮益方面は知らない」が好きだと思って、何か語りたくなった。まず何といってもタイトルがかっこいい。省略がかっこいい。

(わたしは) 宮益方面 (のこと) は知らない
宮益方面は () を知らない
宮益 (坂) 方面は知らない

意味の上でも音韻上でもかっこよさによって省かれているかっこよさがかっこいい。「宮益方面」の反対側にある道玄坂は、ドーゲンホーム（ドイツ語みたいだな）とはいわない。一度か二度だけ通ったことのある宮益方面は整然としたところだった。東京は詳しくないので、実際はもう少し道に迷いながら通ったかもしれない。

渋谷駅から股が割れて尿が流れる
あみだくじの一本はラブホテルへ通じる

宮益坂と道玄坂は坂なので、上るか下るかしなければならぬ。渋谷駅から来たら上るしかなく、宮益坂・道玄坂から渋谷駅へは下るしかない。「股」というのは、渋谷駅から分かれる宮益坂と道玄坂を見立ててのことだろうとおもった。ふつうの尿は液体なので、上から下に流れるものなのに、この「尿」は、谷底である渋谷駅から「流れる」し、坂を「上る」。ということは、排泄された液体が、意思と力を持つてゐる。意思と力はあるのに、「流れる」。尿は終るまで、どうしてもなく流れる。駅から出て、それぞれが選んでいる方向が「尿」であり「あみだくじ」。生物の体外に出される物質は、排泄と分泌で区別される。排泄と分泌のちがいは有益か無益で判断される（母乳は分泌）。この尿は便器ではなく、地面に流れる。地面といっても、フローリングのようなつるつるしたところでは水たまりのようになるだけだから、アスファルトの凹凸部分に流れ、枝分かれするような「尿」であり、その尿の一本（ひとり）はラブホテルに遡上する。

コンクリートの下は腐っていてたまに異変に気づく

「コンクリートの下」が腐っているということは、その上を歩くかして、コンクリートの下にある腐った感触を知っている。「コンクリートの下」が腐るなんてことがあるだろうか。「コンクリートの下」は見えないが、腐っていることには確信をもっている。「たまに」は、この周辺を複数回訪れていることを示している。「異変」とはコンクリートの上に着いた足の感触が通常とは違うことを示しており「気づく」とは、そのことを察知することを示している。ラブホに至る道のどこかが腐っている。すべり止め舗装のされた坂道（コンクリートに丸型の溝が並んでいる）？ わたしはそういった経験がないのでわからないが、個人的な感覚過ぎることに、

魅力を感じる。

ラブホテルがひしめいて扉を開けると部屋がひしめき 102 を開けるとやはりひしめいている

最後の「ひしめいている」についてはわからない。最初の「ひしめき」はラブホテルであり、ふたつめの「ひしめき」は部屋であり 102 号室の「ひしめき」は説明されず、わたしたちに任されているし、わたしたちはそれをなんとなく知ってるような気持ちになる。部屋は空間であり、ひしめけるものといえば「酸素」「亡霊」「欲望」であったりするけれども、そのどれもであり、そのどれもでもないのかもしれない。「やはり」は前に続くふたつの「ひしめき」を受けてもいるし、複数回訪れたことによる経験則からくる「やはり」でもある。

銭湯上がりの爽快さで道玄坂を一気に下る!

セックスの後にラーメンを食べたいのはお腹がすく以外の理由があると思うんだ

「銭湯上がりの爽快さ」起こった出来事後の体感として「銭湯」がある。この二行が一番好きかもしれない。さっきまでの重苦しさが嘘のように転調している。スッキリしたのかなと思う。続く「思うんだ」は漠然と誰かへ問いかけてるので、なんだか参加できるような気がするし、かといって、答えなんかまったく出ないようなところが素晴らしいなおもう。「お腹がすく」から食べるのではなく、それ以外の理由がある。うーむ、道玄坂を下ったところにラーメン屋が多いというのもあるだろうし、それこそ一気にエネルギーを補おうとすると、その点、麺というのはひじょうに合理的な形状をしているのかもしれないが、どう考えても、そういうことじゃないだろう。「なんでだろうね」となる。ここ一ヶ月考え続けて、思い出したのが『美味しんぼ（雁屋哲原作/花咲アキラ作画）』で、新聞記者の栗田さんが「ラーメンに惹かれる理由」を語っていたなあ、ということだった。

私いろいろ考えたんだけど、ラーメンで異常な食べ物だと思うの。(中略) 私、ラーメン屋でラーメンを食べている人を見るたびに、考えてしまうの。みんな暗い顔をして黙々と食べているわ。食べる楽しみを享受しているとは思えない、何か罰でも受けているみたい。(中略) 言わば先祖返りを求め、自分の祖先が流されて来たその大本をたどる情熱。そんな情熱に、突き動かされているんじゃないかと思うの。

(中略!) そういう疑問に対する答えを探したいという情熱が、意識の下に潜んでいて、それが日本人をラーメンに向けて引き寄せる、と考えると、なんだかつじつまが合うような気がするの。(『美味しんぼ』38巻 “ラーメン戦争”より)

あくまで、これは「日本人がラーメンに惹かれる理由 (の仮説)」であって「セックスの後にラーメンを食べなくなる理由」ではないし、大本をたどる情熱なんて大げさな…とも思うのだが、部分部分では答えになっているような気がするのだ。なによりセックスのあとにラーメンを食べるとちょっとだけくだけた感じになれるというのはあるかもしれない。定食屋だとキャベツの刻んだのやら生姜焼きやらお漬物やらにいっぱい箸を伸ばしてガチャガチャしてきたり、和にするか洋にするか悩んだり、ソースや醤油といった生活感や趣味嗜好が一気にバーっとでてきて、とっ散らかるので、知らない人とセックスのあとになんか食べようと思ったら、少なくとも定食屋よりはラーメンのほうがよい。それぞれひとつのどんぶりに向き合って、何も知らないまま距離感を保ったままバラバラにならずに食べれるもの、というところでのラーメンなのかなと思う。それに他の飲食店だと、食べ終わっても、なんとなくだらだらできそうな雰囲気があるが、ラーメンにはそれが無い。食べ

終わったらほんとうに終わり。なので、その点もすぐれているように思う。セックスの後にサラダは食べたくない。

+

詩集には、なんだか夜の静けさに書かれたものや、優しいもの、ザク切りのソリッドなものなどがあると感じた。とりわけ「宮益方面は知らない」は朗読（リーディング？）向きだな、と思った。「スマホのメモ欄」も。全体を通していくと、誠実と自由の葛藤をしているように読んだ。その境界に詩があって、この詩集は現時点での決着と思った。

女性の名前は、漫画の人物含め多数出て来るが、男性の名前は、なにげに田中さん（おっぱぶのボーイ）しかないのだと思った。あなた、きみ、男。男の台詞も詩行に多数含まれる。男は通り過ぎても、言葉は残る。それを大事にとっている。声というものは言葉に残らない。人の顔なんかもそうだ。なんとなく頭で思い出せているような気がするものだ。私は声や顔を思い出すとき、ちゃんと思い出せている自信がない。言葉にはその心配がないかわりに、私が思い浮かべているものはなにひとつのらない。読みながら、セックスという言葉も、声や顔のように、ちゃんと思い出せない言葉だったのを、思い出したりした。（2017年6月）

